

平成30年3月3日(土)

老球の細道396号

ルールを熟知する

バスケットボールコーチ 室井 富仁

先月17日(土)18日(日)の二日間は冬型の荒れ模様の天候となってしまった。折しも、あいづ体育館では今シーズン唯一のB2リーグゲーム「福島ファイヤーボンズ対山形ワイヴァンズ」が開催された。ボンズ側の配慮で「会津サンクスデー」と称し、ミニバス、中学生のバスケット部員に格別の優遇措置を配慮してくれた。厳寒にもかかわらず、日曜日の入場者は会津地区開催では過去最高の1,300名を超える記録を達成した。

日頃プロバスケットボールなどのハイレベルのゲームを生で見る機会の少ない会津地区のバスケットボール関係者はとても良い刺激を受けたのではないだろうか。感動は動かなければ見つからない、燃えなければつかめない。

二日目のゲームであった。一日目のゲームは山形が大差で負けていたので、二日目は山形がスタートから集中してゲームを展開した。前日とはまるで別チームに変身し3Qまでリードをした。悪夢は3Q残4分に起こった。

山形がリバウンドから速攻に移った時、福島の選手が山形の選手に対してアンスポーツマンライクファウル。山形がフリースロー2本、山形ボールのアドバンテージを得た。山形のA選手がフリースローを1本決めた後、突然福島のコーチが審判にシューターが違うことを告げた。審判もこれに気づき、ルール通りフリースローの1点をノーカウント、山形スローインなし。福島のセンターラインのスローインからゲームが再開された。

この処置に対して山形ベンチが猛反発。本来なら山形がフリースローを決めてマイボールでもう一度オフェンスができるのだから、この処置の差はゲームの流れを大きく左右する。私も「シューターが間違っていたら、正しいシューターでやり直」と思っていたら、そうではなかった。その後審判に確認したら間違いはないということだった。山形はチーム責任者までが審判の処置に激怒し、ゲームディレクターの私にまでクレームをつけてきた。

この件でゲームの流れは山形から福島へ変わり最後の最後までもつれた。また審判の判定にはその後クレームが相次ぎ荒れたゲームになった。結果的にはホームの福島が逆転勝利したが、ゲームが終わってもしこりが残り後味の悪いゲームとなった。

帰宅後「ゲームディレクター報告書」を書いて、審判のとった判定が正しかったのかどうかを調べた。そしたら日本バスケットボール協会審判部の「○×式規則想定問題集」に偶然にも審判の処置について同じケースが出題されていた。

【ボールをコントロールしている A1 に対し B2 が触れ合いを起こし、アンスポーツマンライク・ファウルが宣せられた。その罰則により、フリースローを行い 1 投目が成功した。2 投目を行う前に フリースロー・シューターが A2 であることに審判が気付いた。処置は、A1 の 1 投目は取り消され、正しいフリースロー・シューターA2 のフリースローも取り消される。センター・ラインからのスロー・インも取り消され、センター・ラインから、B チームのスロー・インによってゲームを再開する】 答えは○である。

福島ボンズのコーチはこのルールを知っていた。私もルールに熟知していれば冷静に対処することができたはずである。いざという時に自分を見失わないためにも、「知ること」「準備」「相手の話を良く聞く」「状況を冷静に判断する」ことを勉強させられた。